

Title	学会抄録 第10回日本泌尿器科学会中部連合地方会
Author(s)	
Citation	泌尿器科紀要 (1961), 7(4): 555-565
Issue Date	1961-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/112122
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

学 会 抄 録

第10回 日本泌尿器科学会中部連合地方会

昭和34年11月1日 於 和歌山医大

特 別 講 演

前立腺を中心とした男性性腺及び附属性腺の代謝について

和歌山医大助教授 金沢 稔

私は数年来、前立腺を主とした男性性腺及び附属性腺について、TCA サイクル（以下 TC と略す）を中心とした代謝に関する各種の実験を行つて来たが、今回は殊に前立腺肥大症のクエン酸代謝の本態を究める為、前立腺の Aconitase 及びその補酵素、Transaminase 活性、高エネルギー磷酸化合物、パロチン等に関する基礎的実験を行つたが今回は之等を統合した成績について述べる。

I 犬及び家兎の前立腺、前立腺液、睪丸、家兎精囊腺、人に於ける前立腺肥大症、前立腺癌の前立腺組織、睪丸には何れも TCA サイクルが存在する。性ホルモンは之等性腺、附属性腺の解糖、呼吸に一定の影響を及ぼし、アンドロゲンはその解糖を低下せしめ、TC の運行を促進せしめる。去勢又はエストロゲンは乳酸代謝障害と TC の低下を招来すると共に ATP 系の障害を来す。更にエストロゲンは α ケトグルタル酸の代謝異常を惹起するものと想像される。

II 前立腺肥大症前立腺組織に於ても解糖に比し TC 代謝は小であるがクエン酸値が極めて高い点が特異的である。正常前立腺に於けるクエン酸値は前立腺肥大症に於けるよりはるかに小であるが、他の TC 代謝物に比して比較的高い値を示す

III TC 代謝物長期投与により犬前立腺、睪丸は萎縮を来す 殊にフマル酸投与群に於ては萎縮が著明である。之等は何れも TC の障害にると考えられるが、同じ TC 代謝物でもクエン酸、フマル酸は前立腺に対する態度はかなり異なる様である。

IV 前立腺肥大症前立腺組織の CO_2 は ATP 添加により、又 TC 代謝物に ATP を添加すると上昇する。又前立腺組織中高エネルギー磷酸化合物の測定成績より、本症にエネルギー代謝系の障害があることを想像せしめる。

V 前立腺肥大症前立腺組織に於ては組織化学的に又、化学的測定により Aconitase 活性の低下を明らかに認め、又 GOT 活性は GPT 活性に比し極めて大であることが判明した。又 Aconitase の補酵素としての Fe^{++} の減少は認められない。尚本症の前立腺組織中オキサロ酢酸値が比較的大なる事より、本症のクエン酸蓄積は Aconitase 活性低下による TC 自体の障害と、glutamic oxalacetic transamination の逆反応の昂進によるものと推察される。

VI 犬前立腺組織の Aconitase はパロチン、ATP 単独投与ではその活性に著明な変化を与えないが、ATP、パロチン併用投与の場合、明らかにその活性が高まる。

VII パロチンは犬前立腺組織、前立腺組織、前立腺肥大症前立腺組織について TC 何れの基質に於ても酸素消費を上昇せしめ、又パロチン、ATP 同時投与で犬前立腺に於ては TC 代謝物何れの基質に於ても著明に酸素消費を上昇せしめるが、パロチンの濃度の相違によりかなり異なるものがある。

VIII パロチン、ATP、磷酸を前立腺肥大症の治療に用い、殊に之等を併用した症例に於て見るべき効果を収めた。

シンポジウム

尿道疾患の診断及び治療について

司会 阪大教授 楠 隆光

(1) レ線映画による尿道疾患の排尿作用に就て

名大教授 清水圭三

従来私共はレ線映画による尿路の排尿運動の研究を行つて来たが、今回は尿道疾患に就て検索したので、正常尿道の注入時、排尿時状態、外傷性尿道狭窄、尿道結石、肉柱膀胱前立腺肥大症術後、外傷性排尿困難症の術前術後の排尿と排尿中断時の状態をレ線映画により撮影することが出来たので供覧した。

排尿の作用機転、排尿運動に関しては今日尚不明の点が多く、Edward, Caine, Muellner (1958)、教室

の牛田等の研究があり、排尿時には肛門挙筋が弛緩して、膀胱底が下降し、排尿筋が収縮して内尿道口が開くことは多くの意見の一致するところである。

私も教室員の協力により今回撮影したレ線映画により、排尿、中絶の状態を尿道の拡張収縮により知ることが出来たので簡単に記述する。

1. 正常排尿では内尿道口が開大し、前立腺部が紡錘状に膨大し、次で膜様部が拡大して、造影剤が流出する、排尿を中絶させると膜様部が圧縮され、その部を中心として造影剤が上、下方に圧排されて影像が消失する。

2. 尿道狭窄では前立腺部は囊状に膨大し、造影剤が一時狭窄部に停留してから圧出され、中絶時には膜様部狭窄部が膨大するのを見る。

3. 尿道結石では内尿道口の開大が著明で相当圧力が加る状態を知り、前立腺部の結石の周囲に造影剤が一時停留し、次で排出される。

4. Median bar では内尿道口の下降、開大が著明で、造影剤注入時に精囊内に逆流し、排尿後も尚残留像をみる。

5. 前立腺肥大症術後では内尿道口が大きく開大し、前立腺剔除腔は囊状となり、中絶時にも尚残留像をみる。

6. 外傷性排尿困難症では残尿が350ccあり、内尿道切除術後は80ccとなつて失禁状態の治癒した症例で、内尿道口は著しく開口し、強く下方に移動し、前立腺部は囊状に膨大しヒョウタン形をなして排尿される。中絶により造影剤は上部に逆流する像をみる。術後には内尿道口は更に大きく開大し、前立腺部も囊状に拡大し排尿され、造影剤は注入時前立腺精囊に逆流し、排尿後も残留し、中絶時にも内尿道口は収縮せず造影剤の一部は膀胱内へ逆流するのを見る。

下痢の際大便を出さない様に小便を排尿することは仲々困難であり、無理に排尿すると水様便は肛門から漏出することは日常経験することで、同一神経支配下にあることは明らかで、排尿には外括約筋(M. pubococcygeus, M. levator ani, M. sphincter urethrae diaphragmatica externus, M. sphincter ani.)が弛緩し、膀胱底が下方に移動し、次で内尿道口が開大し、前立腺部が拡大して排尿されることを知る。

尚、詳細は追跡的に解析して報告する予定である。

(2) 尿道疾患の尿道膀胱レ線像

金大教授 黒田恭一

教室に於いて実施している尿道膀胱撮影法、即ち、男子に於ける注入時撮影、骨盤底筋収縮時撮影、排尿時撮影、膀胱頸部撮影、前部尿道撮影、女子に於ける

注入時撮影、膀胱三角部撮影、鎖使用法などにつき、夫々の撮影術式、適応などを説明し、主要尿道疾患のレ線像を供覧するとともに、尿道膀胱撮影の応用価値、実施上の注意、副作用にも言及した。而して水溶性造影剤30cc以上(なるべく40cc以上)を用いる注入時撮影による尿道膀胱同時描出法、及び収縮時撮影の併施が、男子排尿障害に対する診断法として特に優れていること、のみならず治療効果の判定上にも役立つこと、並びに女子排尿異常に対する尿道膀胱撮影の診断的価値の小さくないことを強調した。

(3) 尿道炎の細菌学的観察

大阪通信病院 泌尿器科医長 山本 弘

1) 淋菌の Penicillin 耐性

Penicillin (PC) その他有力なる抗生物質療法にもかわらず、現在淋疾は漸増の傾向にあるとされる。再発症例の増加、いわゆる保菌者蔓延の兆等抗 PC 淋疾の出現を示唆する幾多の報告があり、少くとも最近の分離淋菌株の *in vitro* 感受性は明らかに低下を示すという確実なる証拠があげられている。

自験成績によれば、最近1年以内の急性淋疾より分離した淋菌株に対する PC 最小発育阻止濃度分布図は、1956以前の既値成績に比較して著しい変化を示した。即、阻止範囲は2倍以上、その主要阻止濃度は既値の1ピークに比し2ピークが示され、第2ピークの阻止濃度は第1の10倍に及ぶことが判明した。

2) 非淋菌性尿道炎に於ける最近の有意義なる収獲は、陰トリコモナスによる男子尿道炎の存在の確認にある。陰トリコモナスの男子寄生では前立腺が重要視される。

本年3月より10月迄7月間に於ける陰トリコモナスの前立腺寄生に関する自験成績は次の如くである。

非淋菌性尿道炎28、淋疾13、健康男子5計46例中、非淋菌性28例中6例に於てのみ前立腺液から陰トリコモナスの検出に成功した。即ち、非淋菌性尿道炎における前立腺寄生頻度は21%に当り、6例中4例はトリコモナスによる前立腺炎と診断された。

3) 女子に於ける陰トリコモナス尿路寄生

陰トリコモナス陰炎の抗療性且つ再発性の原因として、その尿路寄生の問題が重視される。本問題に関連する自家実験成績は次の如くである。

(I) 無選択的に産婦人科外来患者50例を選び、その陰分泌液につき検査するに、50例中11例(22%)がトリコモナス陽性である。11例中5例(45%)に於て尿中に陰トリコモナスを証明した。

(II) 本年1月より10月迄10月間の大阪通信病院泌尿器科女子外来数は174例にして、中膀胱症状を主訴

とする者は67例39%に当る。67例中尿中腫トリコモナス陽性例は15例、即22%に相当する。15例中尿道部にカルンケル様変化を認めたのは8例（53%）である。

(4) 尿道疾患の外科的療法

阪大助教授 井上彦八郎

尿道疾患の外科的療法は地味であり、しかも難かしい手術の一つとされている。

私はこの難かしい2, 3の原因をあげ、この予防について述べたあと、尿道狭窄の内複雑な形についての手術手技及び1例の尿道上裂に対する尿道形成術について述べた。

最後に Pull-through operation の実際を天然色映画により説明し、24例の経験例についてその手術的事項及び手術成績を報告した。

(5) 女子尿道疾患の診断と治療

阪大講師 伊藤泰二

女子尿道は短い部分にも拘らず、種々の疾患の豊富な発生場所である。しかもこれら疾患の診断は案外難しく、等閑に付せられる傾向があつた。頑固な膀胱炎症状を訴えるにも拘らず、尿検査、膀胱鏡検査その他の一般的検査法によつて著変を認めえないような症例に於いては特にそうであつた。私は最近1年8ヵ月間に当科を訪れた下部尿路症状を訴える女性患者に対して、尿道鏡検査、尿道塗抹標本検査、残尿測定、膀胱壁触診及び切除組織の組織学的検査などを行い、尿道小阜(14例)、尿道脱(1例)、尿道癌(5例)は勿論のこと、顆粒状尿道炎(15例)、ポリープ(14例)、老年性尿道炎(10例)、内分泌性膀胱症(24例)、膀胱頸部白斑(5例)、膀胱頸部狭窄(24例)、尿道狭窄(7例)及び尿道憩室(3例)など137例の興味ある膀胱頸部、尿道疾患を見出すことが出来たので、これらの診断及び治療について概観した。

一 般 演 説

1. 矮小腎の2例

北野病院 原口泰彦・井口久男・山脇春夫

第1例 三木〇子、19才、女子

数週間前より慢性膀胱炎の症状あり、排泄性ピエログラフィーにて左側排泄なし、腎結核の疑いにて開腹、ピンポン玉大の水腫様の左側を発見剔出、大さ4.5×3×3.5cm 重量 24gr(腎内容 10gr)

第2例 橋本〇子、44才、女子

半年前より慢性膀胱炎症状あり、排泄性ピエログラフィーにて右側排泄なし、右腎結核を疑い開腹するに、殆々鶏卵大の右腎を発見剔出す。大さ6.5×4.5×

4cm 重量 40gr.

2. 囊腫腎手術治療例

清水圭三・三矢英輔・前川昭・牧野昌彦(名大)

最近10年間に囊腫腎入院患者10例を経験した。これらの症例に関する統計的観察及び治療、予後について述べた。

殊に最近経験せる症例は大なる囊腫はその壁を切除し、小なるものは穿刺内容除去を行い、併せて50%ブドウ糖の注入を行つたところ術後囊腫の大きさ半分以下となり、自覚症状消失し、極めて良い成績を得た。

追 加 辻 一郎(北大)

私達の経験によりますと、囊胞穿刺により一時的に自覚症状は軽減しますが、多くは1, 2年後再発し、且つ腎機能もむしろ悪化するものが多い様に思います

追 加 片村永樹(京大)

最近5年間に、8例の囊胞腎患者に、囊胞穿刺および、50% glucose 注入療法をおこなつたが、その結果を、色素排泄、IVP、生化学的検査、腎クリアランス法などによつて観察したが、術前にくらべ、改善されたものは1例のみで、そのほとんどは不変であり、むしろ改悪した例もあつた。したがつて、再灌溜を、このような方法ではふせげないばかりでなく、出血、感染などによる炎症性変化の増強で、さらに腎の荒廢を増強するようにおもわれる。

追 加 楠 隆光(阪大)

私も辻教授のお考えに賛成します。術後に詳細に腎機能を検べて見ると、予想に反して機能障害の高度になることは、既に欧米でも立証されている。

次にこのような腎異常は、今日では一般には囊胞腎と呼称されている様である。

3. 腎部分切除の症例

石山勝蔵・篠田 孝・伊藤鉦二(岐阜医大)

腎部分切除術について適応症、手術々式を述べ、併せて最近当科において行つた5例について、その手術成績の概要を述べた。術後尿の異常所見は、約50日で消退し、結核菌は培養で、2例に3週間後まで陽性であつた。

手術成績は良好で、本手術は適応症には、試むべき価値のある合理的且つ安全な外科的療法と考える。

追 加 近藤 淳(岡大)

教室において過去3年間に行つた腎部分切除の9症例(腎結核4例、腎結石5例)について、その適応、手術々式、平均切除腎組織重量、血流停止時間、術後々出血について述べ、切除量が多い時には腎固定術を併用すべきである事を述べた。

4. Casectomy 症例追加

大越正秋・栗原克康（関東通信）

腎結核の化学療法で処理できないような空洞に対して最近保存的手術が種々行なわれるようになった。それには Kavernotomie (Staepler) Kavernektomie, Casectomy などがある。Casectomy には適訳がないが、しいて訳せば乾酪物質除去術となり、これは空洞を開いて乾酪物質を清掃し、ストレプトマイシンの粉末を入れ、空洞を閉鎖する手術である。これは Couveaine が1957年 Spéléotomie (この意味は Kavernotomie である) として発表したことに始まり、我国では我々の例が最初のものである。我々は1958年末以来3例にこの手術を施行し、最初の2例は既に10カ月を経過しているが、尿清澄、菌陰性を続け経過良好であり治癒したものと思われるが、最終的評価を行なうにはまだ早すぎる。

追 加 仁平寛巳（京大）

残腎結核に対して Kavernotomie を行つた1例を追加し、PSP, Clearance test, NPN, Electrolytes of blood serum 等よりみて手術的侵襲、手術に伴う危険性等が少いこと述べた。

追 加 禰 隆光（阪大）

大越博士のおやりになつた様な手術の際に筋片をお入れになるのは、どの様なお考えでしようか、私は、考え様によっては、この様な場合の手術は細菌感染病巣の手術ですから、何も入れない方がよいとも考えられますが、私も同様の傾向の手術をした事がありますが、何も入れないで治癒しております

回 答 大越正秋

空洞内筋片挿入は死腔をなくするという意味であり、肺の空洞手術になつたわけです。有茎筋片がよいと肺結核の際にいわれておりますので、腎結核の場合も試みるべきと思いますが、手術がややこみ入つていて私共の1例では尿瘻となつて2次的腎切除のやむなきに至りました。

5. 後腹膜腫瘍の症例

矢野 登・多田 茂・今中千秋・来田 実（三重大）

軽度のレックリングハウゼン様皮膚変化を有する患者に於て、急激に發育せる後腹膜腫瘍を来した症例について報告する。

症例：26才 女子

主訴：右腰部，右上腿の神経痛様疼痛

本症例は主訴を訴えしより約1カ月で2000gの後腹膜腫瘍を剔除し、且つ、皮膚にレックリングハウゼン様色素斑、小腫瘍を認めた。後腹膜腫瘍は剔除後1カ月の後に再発を示し、その發育は急激で再度剔除を

行つたが、更に10日後に再發育を来し、現在レントゲン治療を行つて小康を得ている。剔除腫瘍は Fibrosarkom と診断された。以上症例につき簡単に文献的考察を加えた。

6. Renal ischemia に関する実験的研究(第3報)

石川昌義・杉村克治・巽 祐彦（奈良医大）

演者は先に一過性の renal ischemia 後の腎機能障礙に Ethylurethane が局所低温と同様良好に作用する事を見出した。今回はこれら二者が腎内血行動態に及ぼす影響を大動脈内墨汁注入法により観察したが EU 投与群は対象群と異らず、局所低温群は良好な分布を見た。一過性腎阻血後の腎皮質の ischemia と密接な関係ありと思われる crossed blanching なる現象に対しても同様の傾向を示した。

次に腎支配領域における交感神経遮断の目的に持続硬膜外麻酔を応用したが対象例に認められる腎動脈阻血操作部のクビレ及びその分枝の血管収縮像の改善に役立つやうであるが更に症例を重ねたいと思う。

7. 老人の泌尿器科学的検索(第4報)

夜間多尿について 小田完五・中橋弥光・上田 恵一（京府大）浦上芳達（京都第1日赤病院）

尿量の調節に深い関係を有する血清 ADS を Birnie 法によつて測定し、1日中における尿量の週期性、殊に昼夜の尿量の変動の原因を追求した。

健康成人(18~28才)4例の夜間と昼間との尿量の差は -256 ± 124 cc, ADS の差は $+13.8 \pm 6.7$ で共に5%以下の危険率で有意である。前立腺肥大症患者(55才, 77才), 膀胱結石患者(61才)の間と昼間との尿量の差は夫々 $-3, +140, +150$ cc, ADS の差は夫々 $+1.6, -4.9, -5.6$ で尿量差は夜間増加, ADS 差は夜間減少の傾向がみられた。

以上の成績から ADS 増減の原因は別として健康青年者の尿量が昼間より夜間に少く、老人の尿量が昼間より夜間に多い理由を血清 ADS の昼夜の変動によつて説明出来る。

8. 特発性腎出血の病理組織学的研究

長谷川真常（金大）

特発性腎出血の診断で腎摘除術の行われた摘出腎9例につき詳細な組織学的検索を行つた結果、腎皮質は比較的变化が少く、髓質に於いて鬱血によると考えられる毛細血管の拡張或いは破綻出血像と、乳頭部附近の間質の細胞浸潤、嚢胞形成、石灰沈着を伴う症例を約半数に認めたが、主要病変部は腎杯乳頭部附近に見られ、全例に於いて同部血管壁の硬化性変化と、その分布領域の出血を伴う組織変性像を認めた。合成樹脂

注入法によって得た腎盂腎杯部附近の特異な血管構築（螺旋動脈）を示し、腎性血尿に於ける腎杯乳頭部の変化と本血管との関係につき私見を述べた（詳細は原著に譲る）

9. 興味あると思われる尿管症の手術治験例

瀬川陽一・西川恵章（和医大）

58才，男。11年前左腎剔除術を受け、頻尿を主訴として訪れた。膀胱鏡検査では後壁に憩室の開口らしき空洞を認め、膀胱レ線像では尿管逆流現象及び憩室様陰影を認めた。RP では尿管症の所見で尿管は屈折して著明に拡張していた。逆流による感染防止と頻尿の苦痛から去らしめるため右腰部尿管瘻を設置したが、手術時、拡張した尿管は二重に屈折し密に癒着していたのでこれを剥離すると共に整復した。

10. 尿管炎によると思われる腎疝痛について

新谷 浩・喜多芳武（関西医大）

尿管疾患のために腎疝痛をおこすことは日常瘻々経験する所である。腎疝痛の原因は結石、腫瘍、奇型、攣縮、特異的炎症、圧迫等が明らかにされるが、吾々は最近腎疝痛患者において、尿管口の発赤、腫張を認めるのみで度重なる検査の結果、上記の原因は全く発見出来ず、更に尿砂、塩類尿による刺戟等の原因も考え難い3症例に遭遇。経過及治癒機転よりして或は尿管の非特異性炎症によるものではないかと考える。

追 加 石山勝蔵（岐阜医大）

非特異性炎症による尿管狭窄の為、頻回の疝痛発作に悩んだ20才女子に対し、病変部を含めて尿管を約8cm切除し、尿管回腸膀胱吻合術を施行し全治せしめ得た。

11. 腎結核に併発せる尿管狭窄に対する1, 2の手術経験

植原憲章・児玉伸二・西田 勉（熊大）

化学療法の普及と共に腎結核に併発せる尿管結核が屢々狭窄を形成し、上部尿路へ水腫形成、或は原発疾患である腎結核へ悪影響を及ぼせる症例に折々遭遇するが、我々は残腎の尿管狭窄の為救急処置として尿管皮膚瘻手術を行い、該術1年7カ月後を経て尿管廻腸膀胱吻合術を行った例、尿管下端的狭窄を切除、尿管を膀胱へ再移植した例、腎盂、尿管移行部狭窄の拡張手術を行った例等について報告した。

追 加 石山勝蔵（岐阜医大）

24才，男。結核の為右腎摘出術後、1年半の時、急に左腎部の疝痛発作・無尿を来し、左尿管皮膚瘻手術を行い、該術半年後尿管回腸膀胱吻合術を行い経過良好である。

12. 婦人科手術後の尿路損傷の治験

岡 直友・後藤 武・菅野英男（名市大）

婦人科手術後に起つた、尿管狭窄12例例（以下「点」と記す）、尿管腔瘻11点、尿管閉鎖7点、尿管皮膚瘻1点、尿管子宮瘻1点、尿管破綻による下腹部尿溜溜腫1点、膀胱腔瘻2例（点）、膀胱子宮瘻1点、膀胱腔直腸瘻1点の尿路損傷に対し、尿管膀胱新吻合術17例（以下「点」とかく）尿管拡張並成形成術5点、尿管端々吻合術3点、尿管S状腸吻合術3点、腎瘻術4点、膀胱腔瘻閉鎖術3点、廻腸膀胱形成術1点を行った。最も多いのは尿管に対する手術で、重要なものと考え、主としてこれに関し、手術成績を回顧しつつ、手術法を批判して私見を述べた。

尿管の損傷を来せるものは上部尿路には大なり小なりの拡張と大なり小なりの腎機能障害或は3例にはその消失をみていたが、手術による通過障害除去後は、4点を除いてすべて腎盂形態、腎機能の正常化をみた。但しそれには12カ月の長さを要せるものもある。

尿管膀胱新吻合には、先ず経腹膜性に尿管に到達し、然る後、後膜々性経路よりの尿管剥離を併せ行つて術を施行するのが最もよい。

尿管には或程度の牽引が加つても尿管膀胱新吻合術・尿管端々吻合術の結果を不良としない。

移植尿管端が術後膀胱内腔に突隆して止り尿管逆流を阻止する状態になるかどうかは、尿管の術施行時の牽引状想や、尿管の固定とは関係がない

尿管狭窄に対する尿管拡張法は一過性の効果しかない

骨盤に対するdrainingは若し行うなら経直腸性に行うのがよい

13. 女子尿瘻の治療

稲田 務・仁平寛巳 日野 豪 片村永樹・中川清秀・北山太一（京大）

最近吾々の経験した子宮全摘除術後の尿管腔瘻3例に対して2例は尿管膀胱新吻合術、1例は尿管尿管吻合術を行い、右腎欠損を伴つた先天性膀胱腔瘻には腔式瘻孔閉鎖術、高度の結核性萎縮膀胱より生じた膀胱腔瘻には尿管S状腸吻合術を施行した。以上5例の経過を報告すると共に、女子尿瘻特に婦人科的手術による尿路損傷例の治療について述べた。

追 加（12・及び13） 白井浩三（阪大）

私達の教室では、昭和32年より現在迄の間に、婦人科的手術後に発生せる尿路疾患例は、計14例である。これらを疾患別についてみると、尿管狭窄3例、尿瘻11例である。尿瘻の中では尿管腔瘻の6例が過半を占めている。原因となつた婦人科的手術の大部分が広汎性子宮全摘除術である。

これら14例に対し13例手術を行ったが、保存的手術が大部分で、廻腸を使用する手術が5例で最も多い。

そしていづれも極めて満足な結果を得ている。

14. 症例 イ)尿管瘤 ロ)馬蹄鉄腎

小田完五・中橋弥光・沖田和男(京府大)

イ) 袖口某, 39才 農家婦, 初診昭和34年5月18日 2週前より突然排尿中絶, 頻尿, 歩行時尿失禁を訴え, 体位により排尿可能なるを知つた。膀胱鏡検査により左右尿管口に夫々鶏卵大, 小指頭大の腫瘤と中指頭大球状結石1ヶを認め, レ線学的に両側の水腎, 尿管及び左尿管下端の拡張と膀胱結石像を認めた。膀胱高位切開により切石術, 腫瘤剔除, 尿管口形成術を行い治癒せしめた。結石は尿酸石灰で, 剔除組織の尿管側上皮は膀胱側より薄く, 粘膜下層に軽度の非特異性慢性炎症性細胞浸潤があり中央に筋層を認めた。尚自験例を加えた本邦報告例95例に就て簡単な統計的観察を行つた。

ロ) 李某, 53才, 男, 土木業, 初診昭和34年5月8日。8年前より左側腹部に疝痛様発作を繰返し, 昨年9月外科にて腸捻転の疑の下に開腹術を受けたが治癒せず レ線学的に右腎盂の著明な拡張, 腎盂長軸の下方交叉, 両腎下極の融合を認め, 右腎水腫を伴う馬蹄鉄腎と診断後腹膜的に橋部中央で離断右半腎剔除術を行い症状は全く消失した。剔除腎実質の萎縮は著明で橋部は腎実質より構成されていた。

追 加 後藤 薫・久世益治(京大)

昭和32年より34年10月の間に馬蹄鉄腎10例を経験し, その内2例に狭部離断術, 1例に腎盂切石・腎腰術を施行した。最近に行つた離断術の症例について述べた。

質 問 辻 一郎(北大)

尿管瘤の手術後, 膀胱尿管逆流現象が屢々おこる様ですか?此の点に関して手術時どの様な考慮が必要か御教示下さい。

回 答 小田完五(京府大)

術後予想される膀胱尿管逆流現象に対して特別な考慮をはらつていない。

15. 腹部X線断層撮影法による尿路結石症の診断について 森 昭 上埜吉雄・平岡 登(済生会大阪中津)

尿路結石はごく一部のものを除いてはレ線を吸収し, 単純撮影においてもよくその陰影をあたえるものである。しかし時には腸内ガス, 骨盤陰影などと結石陰影との重積により結石の存在を明らかに判定し難い症例を経験する。我々はおかかる症例に対してX線断層撮影法の応用を試みかなりの成績を取め得た。今回は主として尿管結石症例について述べ, そのトモグラムをスライドによつて供覧した。

16. 近年多発の傾向にある尿石症について(第1報)

田村峯雄・藤井達郎・豊島 叔(大阪市大)

我国において近時特に上部尿石症が増加の傾向にあることは一般の注目するところであるが幾多の研究者の努力に拘らず本症の成因の総べてが解明されたといふことは出来ない この機会に於て高橋, Mosqueira-Lomas の主張する如く本症を一症候群とみなして各方面から多面的に検討する必要が有ると考えられる。

山崎は早くもこの点に注目してその研究の第1篇を掲載せられたが我々も前年来同様の観点の下に臨床的研究をすすめている。今回はその一部として統計的観察と自律神経機能検査の結果の一部を報告する。

17. サンゴ樹状腎結石の腎切石術による治癒

岡 直友・後藤 武・塚本俊雄(名市大泌尿科)

男子4例・女子3例についての経験を述べる。何れも成人で, 単発性結石4例, 多発性結石3例である。術後腎機能は4例に消失, 3例に或程度保存されていた。何れの症例にも腎のかかなりの程度の感染があり, 殊に4例は結石性膿腫腎を思わせる高度の尿混濁をみた。細菌は培養上2例に陰性, 1例にブドウ球菌, 1例に連鎖球菌を認めた。3例には検索を施行していない。腎萎縮時間は11~17分間。腎切開は3~10cm 腎盂排液管は1例は設置せず 6例には4~15日間存置した。手術創の治癒日数18~38日。一過性の尿瘻を来したものは高度な後出血をみた1例のみであつた。結石片の数個づつ残存したものが2例ある。

術後の腎機能は, 結石片を残存した2例を除き大体良好的に恢復したが, 尿の混濁の消失という点を併せて考えると, 全治といえるものは感染の著しく或は高度でなかつた3例のみである。1例は後出血高度のため腎摘出術を施行した。1例は術前に比すれば尿混濁は遙に減じ腎機能は良好化した。他の2例は結石片残存例であつて, 尿の高度の混濁は継続しているが, そのうち検索された1例では術後242日にはレ線的に腎機能のかかなりの恢復がみられている。

要するにかなりの感染のあるサンゴ樹状結石でも腎切石で, 結石片さえ残存せしめぬならば十分に治癒せしめ得るものである。

追 加 本郷美弥(京大)

京大泌尿器科に於ける昭和24年より昭和33年迄の珊瑚樹状結石の入院患者27例中腎切石を行つたのは11例である。反対側腎との関係では, 反対腎が正常の場合はむしろ腎摘の比率が多いが機能不良のものではほとんどが腎切石である。腎切石後機能の改善が認められたのは6例で, この中1例は高度の後出血を来したが腎剔除術を行わずに治癒し得た。

18. 尿路結石症を主症状とする原発性副甲状腺機能亢進症

柳 隆光・園田孝夫(阪大)

症例1: 50才の女子 両側腎結石を有し, 高血症, 低磷血症及び過 Ca 尿症を示し, 頭蓋骨 X線像に一部脱灰現象を認む。

症例2: 39才の男子 再発性腎結石, 高 Ca 血症, 低磷血症及び過 Ca 尿症を有する症例で時に嘔気, 嘔吐を伴う。

以上2例に対して, %TRP 測定, Phosphate deprivation test, Ca-Toleranse test を行い, 原発性副甲状腺機能亢進症を疑い, 何れも手術的に副甲状腺腫を確認し, これを剔除する事によつて, 一般状態の改善が得られた。組織学的には, 何れも明主細胞増殖による腺腫と診断された。

19. 婦人科手術により偶然発見せる尿管腫瘍の1例

三毛俊弘・谷沢 修(紀南病院)

婦人科にて卵管結紮の手術時, 偶然発見された尿管腫瘍で, 患者年令35才の婦人で, 剔出標本は 5.0×4.3×4.0cm, 重量34.2g, 組織学的には腺腫で, 所々に腺癌化せる病巣を認めた。自覚的には約4カ月前より軽度の排尿痛を認めた。

20. 脊椎破裂による尿路障害の1例

上月 実・森脇 宏(神戸医大)

脊椎破裂は小児の脊椎畸形の普遍的タイプの一つであり, 之による尿路障害も多く経験される所である。我々は11才女子で腰仙部の meningocele を有し, 尿失禁, 両側水腎症, 膀胱尿管逆流現象を伴う一例に, 長期間の留置カテーテル及び modified mathisen method による尿管膀胱新吻合術を行つて, 水腎症の減退, 逆流現象の防止等の好結果を得た。

追 加 辻 一郎(北大)

我々も約10例の小児先天性神経因性膀胱の経験を有するが, 残尿少く且つ失禁もない様にしてやるのに, よい方法がないので困っている。此の点に関する御意見を伺えれば幸いです

回 答 森脇 宏

この種疾患の排尿コントロールには我々も難渋して居る所であるが, 25才男子の spina bifida による失禁患者に spastic condition を改善する目的でスコパンを連用し同時に manually controled closed-drainage (夜間) 及び Crede's expression 及びによる排尿訓練を行つて著しく膀胱容量を増し残尿を減退せしめ, 時間ぎめ排尿の併用と相まつて退院時には満足すべき control を確立した経験があるが尚経過観察中である。

21. 男子の膀胱頸部レ線像について

柳源功一(金大)

第47回日本泌尿器科学会総会において発表した膀胱頸部撮影法を用い, 正常男子52例, 前立腺症20例, 神経因性膀胱9例について, 背位撮影及び45度斜位撮影を施行した結果各々を3型に分類し, 概要をシエーマ並びにレ線像について説明した。

22. 膀胱腫瘍に対する Co⁶⁰ 遠距離大量照射の経験

平松信夫・長谷川晃道・岡田令一(大阪警察)

Picker 1000C 大量遠隔廻転装置(線源953C)を以て膀胱腫瘍5例(良性乳頭腫1例, 扁平上皮癌2例, 移行上皮癌1例, 未分化癌1例)に5000~8000rの Co⁶⁰ 大量遠隔照射を行えり。良性乳頭腫には電気凝固術後照射し6カ月後尚再発を見ず 膀胱癌の中2例は部分切除後の照射で転移, 再発なく現在の処著効を奏し, 手術不能の2例は腫瘍縮小せし程度にて1例は肺転移を見た。Co⁶⁰照射の結果赤血球, Hb, 白血球は減少, 淋巴球, 好中球減, 好酸球は増加せり。肝機能に著変なく皮膚は約5000rにて色素沈着, 脱毛を見, 膀胱殊に直腸粘膜は3000~5000rにて刺戟症状が発現し下痢, 血便等を見た。以上の副作用はX線の夫れに比し極めて軽微なりき。

23. 膀胱の求心性神経支配に関する実験的研究(第3報)

高安久雄・坂川邦彦(新大)

蝟蟻坐骨神経膀胱枝単一求心性線維—膀胱標本を用い, 求心性神経線維の種類, 太さの分布, 支配領域及びそれに附属する知覚受容器の種類, 性状等を調べ, また坐骨神経膀胱枝を電子顕微鏡的に観察し, 若干の成績を得たことは, 一部既報の如くであるが, 更にこれを分析し, 文献の考察を加えつつ述べる。なお併せて哺乳類膀胱並びに膀胱以外の諸内臓器壁等の求心性神経支配と比較して, それらに存在する知覚受容器に伸展受容器としての通有性を認め, 機能的に本質的には殆んど異なるところがないと考えられた。

24. 両側尿管廻腸膀胱吻合術後長期を経て発生した穿孔性腹膜炎

黒田恭一・山本 嶽・津川竜三(金大)

45才家婦, 2年前に子宮癌の診断の下に某病院にて広汎性子宮全剔除術をうけたのち, 左側尿管瘻右側水腎症を惹起, 3カ月後に当科において両側尿管廻腸膀胱吻合術を実施した。術後極めて順調に1年9カ月を経過したが本年8月中旬突然持続性腹痛を訴え, 導尿で約500cc尿を得るが, 悪心嘔吐, 排便ガス排出の停止を認め, 腹壁筋性防禦, 白血球数増多を認めるので本学第1外科にて開腹の結果, 急性腹膜炎であり, 原因は吻合廻腸の右側盲端部における微細な穿孔によるものと判明した。穿孔部を巾着縫合し術後2カ月半, 全く健康である。

25. 交叉性辜丸偏位の1例

馬場正次・柏川良三(大阪中央)

67才 Prostatismを呈す患者において、全去勢術施行時、固有鞘膜腔は慢性陰嚢水腫の状態を呈し、固有鞘膜を切開するに、黄色透明の漿液多量排出をみとめた。腔内には2個の辜丸があり、その各々に、精管精索を有し、その精索間には、無花果大の筋肉様物質突出し、子宮状を呈し、2個の辜丸との外観的關係は恰も子宮の両側に2個の卵巣の存する如き状に似ていた。辜丸偏位のうち甚だ稀有な陰嚢水腫症状を伴える交叉性辜丸偏位を経験した1例につき報告した。

26. Transseptal Orchiopexy の経験

百瀬剛一・平岡 真(千葉大)

辜丸を陰嚢中隔を通して反対側陰嚢内に固定する transseptal orchiopexy の経験を述べた。

27. 副腎性器症候群の一例?

江本弘一・谷 徹郎・武田克之(徳大)

9才の女兒に男性様顔貌、面疱発生、外陰部に恥毛発生、尿道、陰口の開口不全などあり、17-KSの著明な増量があり Jailer の Test (+)にて 17-KS 4.1mgに低下し、現在陰核切除、陰唇整形と共に Decadron 0.5mg 投与により患者は内向性の性質であつたが比較的明朗となり、面疱消失した。なお血圧 120mmHgより 112mmHg に低下した。

以上の結果検査不十分ではありますが、一応副腎男性化症を疑っていますが、今後なお検索して確認したいと思つています

追 加 楠 隆光(阪大)

この様な広い意味で Intersex に入るべき患者の診断の際には、体細胞の Sex Chromatin 値を測定することを必要と考える。また我々としてはかかる症例に遭遇する機会が少ないのであるから、その症例を取扱う機会を得た際には開腹術をすとか、副腎を直接に見るなどにより、自分の経験を深めることが必要だと考えられる。

28. 男子性腺不全症の臨床 百瀬剛一・島崎 淳・片山 喬・内海 滉・遠藤博志(千葉大)

男子性腺不全症患者に於て高ゴナドトロピン性のもの10例、低ゴナドトロピン性のもの1例、及び ICSHのみ欠如を来す fertile eunuchs 2例に就き臨床的に観察した。高ゴナドトロピン性のものは尿中ゴナドトロピン排泄量 32m.u.u 以上、17KS は半数に低値をみとめ、辜丸組織像も定型的な Ghost tubule、間質細胞増加をみたが、若干に所謂 dysgenetic tubule があり、性クロマチンは何れも男性型であつた。低ゴナドトロピン性、及び fertile eunuchs のものは何れ

も定型的所見を認めた。

かかる症例にロルシヤハ・テストを行い、高ゴナドトロピン性のものは、W(-), F%, A% 上昇して知能低位・適応欲如・非社会的・両貧性で、低ゴナドトロピン性のもの C' S', ΣK, Σc はが上昇して不安・抑圧的傾向がある。

29. 男子不妊症の臨床的研究

志田圭三・武田裕介(東医歯大)

不妊を主訴とせる 116例に於て精子所見正常のものは4例のみ、無精子症は46例の多きに達している。総精子数 50×10^6 以下の40例について尿中 Gonadotropin 尿 17-KS、精液果糖量、辜丸組織検査を行つてみると、3型に分ける事が出来る。第1型はG排泄多いもので、17-KS、果糖量は正常に近く、辜丸は精細管不同の萎縮像をなし、基底膜のヒアルン化肥厚、間細胞の偽性腺腫様増殖あり、原発性辜丸萎縮と考えられ、ホルモン療法奏効。

第2型はG排泄の少い型で、17-KS 果糖量少く、辜丸は基底膜肥厚なく、単純性萎縮で、続発性のもので、ホルモン療法で奏効する。第3型はG排泄正常のもので、1, 2型の間中である。

30. 男子不妊症患者の精液中果糖量及び果糖分解作用について 石神襄次・森 昭・山本 治(大阪医大)

男子不妊症患者70例中20例の精液中果糖量及び果糖の分解作用を検索した。果糖量では正常例に比しむしろ無精子症、乏精子症の方が高値を示した。果糖分解作用では正常例、乏精子症、無精子症間に著明な差異はなく無精子症でも解糖作用が認められる症例を経験した。果糖は精子のエネルギー源と考えられているがこれに対し我々は精嚢腺射出動物の妊孕力不変な事。精嚢腺撮影後の初回射精液は造影剤混入のため果糖量が少いにもかかわらず精子の運動力は不変な事。無精子症でも解糖作用が認められる事。これ等の点より果糖のみが精子のエネルギー源とは思われず妊孕に必要な絶体的因子とは考えられない。又果糖量と精嚢腺の大小との相関関係をも追求した。

31. ゴナドトロピン製剤の治験 岡元健一郎・斎藤宗吾・田代正昭・愛甲矩義・新山孝二・福崎三彦(鹿大)

ゴナドトロピン製剤を使用した類宦官症のうち、極端な尿中 Gonadotropin (G) 低値を示すもの、可成り低値を示すもの、殆ど正常値を示すもの3例の症例と停留辜丸に対する治療成績を報告した。

Gonadotropin としては Primogonyl, Serotropin, Synahorin 等を使用し、類宦官症には男性ホルモン併用した。

類宦官症は3例ともに症状の好転を認め、特にPri-mogonylを主体とした1例では好結果を得、精子形成の出現をみた。

停留辜丸は思春期前のもの4例、思春期後のもの5例について観察したが、症例により特に10才以下では可動性を増すものを認めたが完全には下降しなかつた。思春期後の5例は共に反応を示さず。類宦官症では青年期のものでも下降の傾向があるのに比し異なる。

32. 精囊腺における代謝機転と副腎ホルモン 大村順一・古畑寛明・大北健逸・丸尾栄一・難波克一・藤田幸利・伊藤文利(岡大)

精液の生化学的検索の重要性に鑑み、精液果糖並びにクエン酸を中心として、これが血糖値、核酸量の関係性に関して、副腎系ホルモンたる Adrenalin, Cortisone, ACTH を選び、皮下又は筋肉内投与と精囊腺内投与の比較を実験し、教室における過去数年間の研究成果を報告した。

33. 各種薬剤の除辜丸家兎の尿中17KSに及ぼす影響について 吉田秀政(大阪医大)

除辜丸家兎に Pantothenyl alcohol, glycyrrhizine, ATP 及び Androgen 混合製剤の一である Durotest を注射しその尿中17KS排泄の消長を観察した。実験に供した2.5~3.0kgの健康家兎の尿中17-KS排泄値は1.34~2.80mg/48時間であり、いづれも去勢により排泄量は一時的に低下し、やがて去勢前値又はそれ以上となる。術後17KS値の変動が一定した時期に各種薬剤の注射を行ったが、glycyrrhizine, ATP, Pantothenyl alcohol 注射により17KS排泄量は明かに増加し、殊に glycyrrhizine では増量を続け減量を来さなかつた。Durotest 初回注射では排泄量の一時的低下を来すが、やがて増量し第2回目注射では減量せずむしろ増加の傾向にあつた。

追 加 志田圭三(東医歯大)

尿中17-KS測定に於て、Girard分割を行う中は恒雅にすぎず。

加水分解時に数滴のフォルマリンを添加すると莖雑色系の発生が最小となる。Girard分割と同等の価をうる。

34. 男性々腺並びに附属性腺に関する研究 清水圭三・三矢英輔・瀬川昭夫・前川 昭・三島 力・鳥居肇・蔡衍 欽・加治安彦・大竹 浩(名大)

前立腺腫瘍における尿中ゴナドトロピンをFSH及びICSHについて分画定量、前立腺腫瘍では増加の傾向を認め、又、女性ホルモン、男性ホルモン投与により減少、プレドニンでも減少、ACTH及びセロト

ロピンでは増加した。17-KS分画では、女性ホルモンではIV~V分画に著明な抑制、男性ホルモンでは逆に増大、ACTHでは全体に抑制、プレドニンでは副腎皮質由来の分画に増加、セロトロピンではIV~V分画に増加を認め、特に腫瘍患者ではII分画の増大が著明である事は注意すべきなり。その他、赤外線分光光度計による各種ステロイドの分析、女性ホルモン定量、Zn⁶⁵による前立腺酸フォとの関係等に就て報告した。

35. 流産防止の為使用した黄体ホルモン剤に起因すると考えられるインターセックス(hormone induced sex change)の1例

楠 隆光・児玉正道・松永武三(阪大)

患者:平〇佐〇子、1カ月。

家族歴:両親は血族結婚で、従兄妹である。

既往歴:満期仮死分娩、母体妊娠中、第6週目より第26週目まで黄体ホルモン剤の注射及び内服を受けている。

初診:昭和34年5月11日。

主訴:外陰部異常。

現症:外陰部は大体女性型であるが、phallusは肥大しており、その先端に外尿道口を発見することが出来る。しかし膣口は認められない。両側には大陰唇とも陰囊とも称してよい部位がある。そしてこの部分には辜丸その他の臓器を触知しない。

上記症例についての検査成績並びに文献的考察を紹介した。

追 加 志田圭三(東医歯大)

luteoidの性分化異常発生機序に関しては次のような因子が考えられる。

1. luteoidのもつ androgen 作用
2. luteoidの下垂体抑制作用
3. luteoidの胎児性腺に対する negativ の抑制作用

①androgen作用のよわい luteoid を使用してもおこる事実から全面的に賛成出来ぬ

③臨床例に於て、luteoid投与により尿中 gonadotropin 減少は稀にみとめられるのみ。また、幼若ラットに progesterone 1mg 3週投与によつて僅かに下垂体抑制効果がみられる事実よりして、或る程度の抑制はあつてもきわめて弱いものと考えられる。

②垂別ラットに対し progesterone を多量、長期間投与しても性腺に対して negativ の直接作用はみられぬ。

以上の事実より考え、妊娠継続の為、極めて多量かつ長期間に亘つて luteoid を与えた場合はともかくと

し、通常用量では luteoid による影響はないものと考えられる。流産し易い胎児はしからざる正常胎児と比較し、種々の異常を有し、かかるものを妊娠継続させ出産させたのであるから異常児の出現する頻度ははるかにたかいたと考えるのも一説ではなからうか。

36. 前立腺結石症例追加

並木重吉・高橋 洋 (国立金沢)

我々は最近1年間に10例の前立腺結石症を経験したので報告する。前立腺結石に合併せる前立腺癌、1例、全肥大症合併3例、全膀胱結石と前立腺肥大症合併1例、全膀胱乳頭腫合併1例、全前立腺炎合併2例、等、前立腺結石には尿路合併症が多くともない。その治療をして全例に前立腺別出及全別出術施行、好結果を得た。

年齢的關係及び性的臓器の特異性から性ホルモンの影響を重視し、更に組織所見を考慮して Moore の云う変化は老人性変性に基きおこつたものと考えたい。

37. 膀胱癌を合併せる前立腺肥について

細田寿郎・新海圭一・近藤義雄 (大阪日生)

77才の患者、今年3月頃某医にて血尿を指摘せられその後排尿障害を来し前立腺肥大症として治療を受けたが頻尿は軽快せず来院した。肛門診にて前立腺鶏卵大、膀胱鏡は挿入不能、尿道膀胱造影術にて膀胱内に鶏卵大の花菜状の陰影欠損を認め34.7.29.手術施行し前立腺肥大症に有茎の鶏卵大膀胱腫瘍及び拇指頭大の膀胱憩室の合併を認め膀胱部分切除術及び前立腺別出術を施行しその後経過は順調であるがこの一例を報告すると共に当科における昭和29年~33年までの5年間の前立腺肥大症について統計的観察を加えた。

38. 放射性磷酸クロームの組織内照射による前立腺癌の治療について

尾関信彦 (岐阜医大)

放射性同位元素による前立腺癌の治療に関しては、既に実験的に P^{32} 及び $CrP^{32}O_4$ の吸収、排泄、分布状態等を検討して来た。今回は主として臨床成績について報告する。即ち前立腺癌患者10例に $CrP^{32}O_4$ を局所注射しその後の放射能血中移行、尿中排泄状態を検するとともに、患者の自覚症状、前立腺触診所見、残尿、血清酸フォ等を検し、注射前より好転せることを知り、また現在の所等副作用も認められない。

$CrP^{32}O_4$ が前立腺癌の治療の一半として効果を期待出来るものであると考えられる。

質 問

町田豊平 (慈恵医大)

- 1) 注入部位が2~6ヶ所では少くないか。
- 2) ヒアルロニダーゼは使用したか。

追 加

町田豊平 (慈恵医大)

前立腺症の2症例に対して、 ^{198}Au 30mc を前立腺

組織内に注入し、 ^{198}Au の前立腺組織内分布及び他の組織への分布状態を、成犬に対する実験例と比較検討した。成犬では、前立腺と関連しているリンパ腺に特に高度な分布を認めるが、癌転移のあるリンパ腺では、ごく程度にしか分布しない。又前立腺組織に ^{198}Au を注入する場合、Hyaluronidaseと一緒に使用した方が、わづかではあるが組織内に均等に分布することを Radioautographie で示した。

追 加

仁平寛巳 (京大)

前立腺癌に対する Radioactive colloidal chromic phosphate ($CrP^{32}O_4$) の組織内注射療法を追加し、根治手術非適応症の多い現状に於て効果を期待出来る治療法の一と考える旨を述べた。

39. 前立腺癌の腫瘍内 Thio-TEPA (テスパミン) 注入療法の治療 稲田 務・酒徳治三郎・片村永樹・玉置 明・本郷美弥・久世益治 (京大)

5例の前立腺癌患者に、テスパミン 20~30mg を会陰部より注入、4~5回におよんだ。

テスパミン注入により、癌組織全体は、線維化し、癌細胞は変性したが、再々注入をくりかえさないと、発育抑制は困難である。しかし、注入さえしておれば、一応の抑制効果は全例にみとめられる。また、1例は、急速に、膿瘍化して崩解がいちじるしかつた。

なお、これら症例の詳細は、原著として、泌尿器科紀要に発表する。

40. 前立腺分泌液に関する研究 道中信也 (広大)

前立腺分泌液の Polarograph 的蛋白波に関する実験を行い、前立腺の機能に関してホルモン投与時における分泌液組成の変動を検討した。

犬前立腺液の Polarograph 的蛋白波は二重波を呈し血清 P. 蛋白波よりも波高が低い。

男性ホルモン投与により前立腺分泌は旺盛となるが、之に伴い P 蛋白波も上昇する。しかし除睾後男性ホルモン投与群では低下する傾向を認めた。Methylandrostenediol の前立腺分泌に及ぼす影響は Testosterone よりも劣る。

必須アミノ酸である Arginin は前立腺分泌液量には関与しないと考えるが P. 蛋白波は上昇した。詳細は原著にゆずる。

41. 尿路感染症に対する Reverin (Pyrrolidino-methyl tetracyclin) の効果

高木峻徳・加古 賢 (大阪医大)

腎切石術後の腎周囲炎で、高熱5日間持続し、各種の抗生物質、解熱剤の投与によるも軽快せず、Reverin (以下 R とす) 250mg 1日2回2日間の併用により解熱し、一般状態も軽快す 前立腺結石で、膀胱

鏡挿入の際誤つて腹腔内に穿孔，直ちに膀胱高位切開により結石を除去，爾後各種抗生物質を投与して経過を観察，高熱5日間持続，一般状態も一進一退なるも R 1日2回 250mg 2日間併用し，高熱，一般状態も改善さる。膀胱癌兼前立腺癌で摘出不能にし尿管皮膚吻合術施行後，再三再四腎盂炎を併発す。その都度各種抗生物質の投与にて寛解していたが，使用毎にその効果は低下して今日に至る。R 1日1回 250mg 静注によりその再発期は著しく延長さる。

42. Specific Technique on Urology

京大泌尿器科 大阪医大泌尿器科

日常吾々が用いている Vasoinstillation, Seminal vesiculography, Epidididymography, testicular Biopsy 等を応用しうる且皮膚縫合を要しない簡便陰囊皮膚切開術の術式をカラーフィルム映画にて供覧し，諸々の要点について述べた。

次いで国産 image amplifier (鳥津製) を使用して，routine に行つている各種の尿路 X線検査法の映画撮影を実施し，機能的 X線診断法の研究を報告した。即ち腎血管撮影法により腎動脈像の描出時期を明らかにし，IVP に於ける腎盂像の描出時期を観察し，自律神経投与による腎盂，尿管運動の影響を検討し，更に精囊撮影に於ける de Graaf 現象を明らかにした。本装置及びその所見を 16mm フィルムにて供覧した。

43. 尿中中性 17-KS の Polarograph 的定量法について

稲田 務・玉置 明 (京大)

Wolfe, Bararetti, 木本の方法を基にして，臨床的に簡便な方法を考案した。その方法について述べ，方法の確立するまでの過程については原著に之をゆずる。

44. 泌尿器科領域に於けるレ線テレビジョンの臨床的応用

清水圭三・三矢英輔・浅井 順・牛田隆雄・須山敬二・三宅弘治 (名大)

吾々はすでにその基礎的事項並びに撮影手技について発表して来たのであるが，今回はその臨床的応用について述べる。即ち，直視下に於てのレ線像を放射線を浴びる事なく観察出来るので患者へのサービスは勿論の事多数の人がその動的像を観察出来るという利点がある。その實際を 16mm 映画に撮影して供覧した。

45. 慢性尿道炎患者の後部尿道レ線像について

馬場正次・柏川良三 (大阪中央)

嘗つて尿道炎に罹患し，尿道不快感乃至は軽度の排

尿痛，残尿感，頻尿等を主訴として外来を訪れた22才から56才までの男子慢性尿道炎患者55名に対して，尿道膀胱レ線撮影を施行した所，その29例において，後部尿道レ線像は，膀胱頸部より精阜上部にかけ円形に拡張し，精阜上端部に狭窄がみられ，所謂中柵様の像を呈した。かかる症例において，持続性サルファ剤或は抗生物質を投与すると共に拡張ブージー療法を施行したが，大半の症例では症状の好転と共にレ線像も改善されることを知つた。

46. 慢性尿路感染症に対するレダキンの使用経験

黒田恭一・山本 嶽・久住治男 田尻伸也・秋山清秀 (金大)

我々は新しい Sulfa 剤である Lederkyn を種々の慢性尿路感染症に使用した結果，通過障害や器質的変化の軽度な症例に対する有効性を確認した。

47. ペニシリンその他 2, 3 抗生物質に対する最近分離淋菌株の感受性について

石原藤太郎・大島 升 山科昭彦 (大阪通信)

我々は男子淋疾患患者の尿道分泌物より最近分離した淋菌株 (昭和34年度: 14株, 同33年度: 4株, 同32年度: 2株, 計20株) に就き，ペニシリンその他 2, 3 抗生物質に対する試験管内感受性実験を行い，次の成績を得た。

- 1) Penicillin : 0.003~0.07u/ml.
- 2) Dihydrostreptomycin 1.0~3.0r/ml.
- 3) Kanamycin : 2.0~7.0r/ml.
- 4) Tetracycline : 0.03~1.0r/ml.
- 5) Oxytetracycline 0.03~0.5r/ml.

48. 男女尿性器における腫トリコモナス寄生について

石原藤太郎・大島 升・倉岡雍男・北村 孝雄 (大阪通信)

昭和34年3月から10月迄約7カ月間の当院に於ける男子非淋菌性尿道炎28例中，その尿中に腫トリコモナス (TV) を認めたものは6例 (21%) であつた。6例中の4例は前立腺分泌液にも TV を証明した。急性淋疾13例，健康男子5例からは之を証明できなかつた。

昭和34年1月から10月迄膀胱症状を主訴とした女子患者67例中15例 (22%) の尿中に TV を証明した。

又，無選択的に検査した産婦人科外来患者50例中，陰分泌物11例 (22%)，カテーテル尿中5例 (10%) に TV を証明した。